解説

「想像の場」としてのインゴルシュタット -『フランケンシュタイン』を生んだ科学と想像の場-[†]

柳原 伸洋*

1. はじめに

ここ数年、わたしの心を捉えて離さないドイツの都市がある。南ドイツ・バイエルン州に属するインゴルシュタット（Ingolstadt）という街だ。同市との「出会い」は、過去に働いていた大学での卒業論文指導を通じてだった。ドイツ現代史、とくに空襲研究に従事する筆者は、以前から空襲被災都市のひとつとして同市の名は見知っていた¹。しかし、同市の放つ歴史的想像力の魅力に気づかせてくれたのは学生だった。彼女の卒業論文は、「近世ドイツの魔女迫害 —インゴルシュタット大学の役割を中心に—」と題され、16～17世紀の魔女裁判を推進した者と批判した者が学んでいたインゴルシュタット大学をテーマに、同大の講義記録（ドイツ語文献）などを利用した論文だった。学部学生の卒論のレベルをはるかに超えた力作であり、当然のことながら高く評価された。

私はこの学生の卒業後も、読書や資料収集の際に「インゴルシュタット」という文字列に自然と意識が向くこととなった。そして、そこに「偶然の重なり」が立ち現れてきたのである。具体的には、1528年に「実在」のファウスト博士が追放された都市、そのほぼ同時期に錬金術研究者パラケルスス（1493-1541頃）が奇蹟を起こしたとされる都市、1776年に秘密結社イルミナティが結成された都市、そして1818年に出版された小説『フランケンシュタイン』の舞台となった都市という重なりである。本論では、この「偶然の重なり」はけっして偶然とはいえないことが明らかになるだろう。ここに関係しているのは、インゴルシュタットの都市史であり、同都市が生み出した歴史的な想像力である。

さて、筆者に与えられた「フィクションとテクノロ

ジーというテーマを人文社会科学の専門知から書く」という使命は果たさねばならない。これは、本稿の3.で扱う小説『フランケンシュタイン』と都市インゴルシュタットの部分に結実してくるだろう。しかしまずは、インゴルシュタットの歴史を押さえつつ都市の特徴を把握し、歴史的想像力の源泉としての同市の特性に迫りたい。そして、「記憶の場」を嚆矢とする昨今の記憶文化研究さらにはフィクションをめぐる諸研究などを活かし、フィクションとテクノロジーとの交差を歴史学的な知見から掘り起こす実験をしてみたい。

2. 前提としての「記憶の場」研究

都市とフィクションという切り口から、どのように「テクノロジー」というお題に切り込むのか不安を覚える読者もおられるだろう。ここでは、人文社会科学の先行研究をひとつ嚆矢させる必要がある。それは「記憶の場 *Les lieux de mémoire*」研究である。

フランスを発信源として1980年代半ばから、「記憶の場」の研究が活性化していく。研究を牽引したピエール・ノラの「記憶の場」とは、記念碑や人物そして神話など、「集合的記憶 *collective memory*」として構築され語られてきた対象の研究成果である[1, 2]。集合的記憶は、個人の記憶ではなく、社会が共有する記憶（祭日、記念式典、歴史展示など）を指す概念である。これは、「物理的な場所」のみに拘束される概念ではない。たとえば、「ジャンヌ・ダルク」をはじめとして、「ツール・ド・フランス」や「ガストロノミー（美食）」もまた、歴史的に象徴的な力を有し集合的記憶として構築されてきた。1990年代後半から、日本においても「記憶の場」に関わる研究成果が出されていく。筆者自身もまた、空襲を中心に記憶の文化史研究に取り組んできた（参考文献の柳原の諸研究を参照）。

[†] Ingolstadt as “the Space of Imagination”: The Place of Science and Imagination Which Created “Frankenstein”
Nobuhiro YANAGIHARA

* 東京女子大学現代教養学部歴史文化専攻
Department of History, School of Arts and Sciences, Tokyo
Woman's Christian University

1 ドイツでは、都市史（郷土史）としての空襲研究はたいへいの場合、都市ごとに出版されている。インゴルシュタットの場合はたとえば、H. Fegert: *Luftangriffe auf Ingolstadt*, Kösching, 1989.

本稿は、「記憶の場」研究に倣さしつつも、それを別角度から眺めようとする意図がある。「記憶の場」とは先述のように、現在へと連なっていく集合的な記憶を指し示す概念だが、本研究では「場＝都市」そのものを前景に押し出し、「場」としてのインゴルシュタットがフィクションの舞台となる事例を考察する。つまり、同市が過去に有した「想像の場」としての影響力を分析する。具体的には、インゴルシュタットが19世紀初頭に放っていた「想像の力」と小説『フランケンシュタイン』との関係について考察する。

本研究は「記憶の場」を現在への連続性ではなく断絶性の観点から更新する意図がある。後に示すように、いまやこの「想像の力」は、インゴルシュタットではすでに失われてしまったといえる。現に、『フランケンシュタイン』は知られているが、同作の舞台がインゴルシュタットだということを想起する人は少ないだろう²。たとえこのことを記憶していたとしても、なぜ19世紀前半に書かれたフィクション作品『フランケンシュタイン』がインゴルシュタットを舞台としたのかについては、説明を要するだろう。本稿はこの問いへのひとつの答えである。

インゴルシュタットが有していた想像性は、本誌を発行する「日本知能情報ファジィ学会」のテーマである人工知能・科学などのキーワードとも密接に結びついている。このように、やや入り組んだ問題設定のもとでの歴史学叙述がうまくいくかどうかは分からないが挑戦してみたい。

3. インゴルシュタット大学史と「脅威」との相関

3.1. インゴルシュタットの概要

インゴルシュタットはミュンヘンとニュルンベルクとのあいだ、そしてドナウ川沿いに位置している。古代ローマ時代にはリーメスと呼ばれる「ローマの境界」付近の要塞となった。「インゴルシュタット」という都市の名は、西暦806年に古文書にはじめて登場するとされる。

6世紀以来、この地を治めていたのはバイエルン公であった。バイエルン公ルートヴィヒ9世(1417-1479)によって、この都市に公国最初の大学が設立されたの

は1472年のことだ。大学設立によって、インゴルシュタットはウィーンやプラハにならぶ、「カトリック精神に満ちた大学」[3]、そして「カトリックの砦」となった[4]。この理由は次節で説明したい。

一般的にカトリックには「守旧的な」イメージが付きまとうが、15世紀にはカトリック内部での改革運動が盛り上がっていた[5]。この改革に大学は大きく寄与したのである。ほかにも、小説『フランケンシュタイン』の着想に決定的な影響を与えたであろう解剖学研究所が18世紀前半に設置されるなど[6]、インゴルシュタット大学は近世から近代へと移行していく時期の科学を支える地位を占めていた。

だが、キリスト教改革の流れは、カトリックと対立するかたちで1517年の「宗教改革運動」として結実する。先述のように、インゴルシュタット大学はカトリック側の改革の中心地であったことから、反プロテスタントの橋頭堡となった。たとえば、マルティン・ルター(1483-1546)を厳しく批判したヨハネス・エック(1486-1543)は、インゴルシュタット大学の神学教授だった。

しかし、これだけでは「なぜ、インゴルシュタットに大学が設置されたのか?」、そして「なぜ、カトリックの砦なのか?」を説得的には語れていない。次節では、「実在」のファウストに言及しつつ、その理由を掘り起こしていこう。

3.2. 「イスラームの脅威」と大学設立

前節では、インゴルシュタットが大学設置後に「カトリックの砦」となったと書いた。実は、この「砦」という表現は、より具体的なイメージをともなって語られていた。それは「イスラームの脅威」である。1453年にコンスタンティノープルを陥落させ16世紀にはウィーンを包囲するまでに至るオスマン＝トルコ帝国は、キリスト教世界に激しい動揺を呼び起こしていた。

では、第一次ウィーン包囲の前年である1528年にインゴルシュタットで起きた「事件」について述べておこう。ここに登場する人物は、ゲーテの著作『ファウスト』で知られるファウスト(歴史的にはファウストゥスとも)である。6月17日の市参事会議事録によれば、ファウストはインゴルシュタットからの追放を命じられている[7]。これは先述の「イスラームの脅威」と結びついた事件だった。

では以下に、日誌資料を引用しておこう。これは、ファウストについてインゴルシュタット近郊の修道院の代表的な立場を務めたキリアン・ライプ(1471-1553)が書き残した日誌である。

2 なお、ツーリズムの観点からはインゴルシュタットでは「フランケンシュタイン・ツアー」が開催されており、2018年の『フランケンシュタイン』誕生200周年に際してのイベントが各種用意されている。参考: <https://www.ingolstadt-erleben.de/frankenstein/geschichte/frankenstein-stadt/> [accessed June 15, 2018]

(前略) ファウストスは、1528年6月5日に「もし太陽と木星がおなじ星座のもとにとどまるならば、預言者（つまり彼のような人物もそのひとりということだろう）が生まれるであろう」と言った。彼は、自分がケルンテンの国境ハレシュタインという場所のヨハネ騎士団の上級騎士修道会員ないし教師であると主張した [8, 9].

引用の前半部分もまた当時の「科学としての占星術」を表していて興味深いが、ここでは後半に着目しよう。ケルンテンとは、オーストリア・ケルンテン州の辺りを指し、現スロベニアとの国境に位置している。そして、同地はオスマン＝トルコの脅威にさらされていた。なお、ハレシュタインという都市は存在せず、ハレンシュタイン（現シュタイアーマルク州）ではないかと考えられている [10]。また、歴史上のファウストがケルンテンのヨハネ騎士団に所属していた可能性は低いとされる [11]。

ここで重要なのは、ファウストの発言の真偽ではない。「ヨハネ騎士団」というタームである。彼らはイスラーム教徒と敵対する騎士修道会³であり、1522年にオスマン帝国のスレイマン大帝によって、本拠地のロドス島から追われていた。ここでは、彼が述べたとされる言葉が、16世紀前半のインゴルシュタットやその周辺、そしてドイツ地域を覆っていた雰囲気を反映したものだという点が重要なのである。

さらに文化史的にも捕捉しておこう。ドイツ・ルネサンスの代表的な画家アルブレヒト・デューラー（1471-1528）はインゴルシュタット近くの都市ニュルンベルクで活躍した画家・数学者だが、1508年の油彩画「万人のキリスト教徒の殉教」では、虐殺の指導者の頭にターバンを巻くことでオスマン帝国の脅威を想起させる描き方をしていた。これは、デューラーの家族がイスラーム勢力が迫りくるハンガリーから逃げてニュルンベルクに移り住んでいたことと無関係ではないだろう。

このような歴史的背景のもとに、インゴルシュタット大学は「キリスト教的な知」の最先端として発展していった。しかし、17世紀にはイギリスを中心に科学革命が起きると、大学という知の組織はキリスト教的な宗教観に基づいた「学」と、実験・観察に導かれた科学的な「学」の両者に分裂していく。インゴルシュタット大学は、このふたつの「学」が入り交じり、拮抗する場でもあった。

図1 「魔女の宴」1510年頃

3.3. 魔女裁判と大学の知

デューラーは、1500年頃に「魔女」を描いたことで知られている。さらに、彼の弟子ハンス・バルドング・グリーン（1485-1545）は、「魔女の宴」という版画を製作している（図1）。「恐怖」を帯びたこの版画は、魔女イメージの代表的存在としてドイツ語圏を中心に流布していくのである。

ルネサンスとは「文芸の復興」であり、知の力によって世界を照らし出すという啓蒙思想とも通じていた。また、プロテスタントを支持したデューラーは、ルターを支援し、彼の肖像画も残している。だが、世界を照らすこの運動は、同時に「暗さ」を際立たせる効果があった点も看過できない。そして、宗教改革や啓蒙主義のコインの裏側として魔女迫害が横行し、多くの犠牲者を生んでいった。以下、インゴルシュタット大学を中心に魔女裁判について述べていこう。

インゴルシュタット大学がカトリック的な宗教観を保持・強化する場であり、同時に科学発展の場でもあった点は、魔女裁判の時代に、同大学が果たした役割について考えれば明らかとなる。

いわゆる「魔女狩り」は、ヨーロッパ中世的なイメージとセットで語られることが多いが、実際には近世と呼ばれる時代に大規模化した現象である。魔女迫害の盛期は16世紀末から17世紀前半にかけてだった。民衆から訴えが出され、各地方の司法が魔女の疑いのある人物（女性とはかぎらない）を裁くという制度は、近代司法システムにもつながっている [12]。

宗教改革に対抗する大学としてのインゴルシュタット大学は、前述のルターの論敵ヨハネス・エックが死去する1543年以降、イエズス会⁴色の濃い大学となっ

3 騎士修道会は、十字軍の遠征時に組織された、各地の住民の保護・自衛・戦闘などを担ったカトリックの武装組織である。

ていく。たとえば、イエズス会の創設期の重要人物ペトルス・カニシウス（1521-1597）は、神学教授としてインゴルシュタット大学の学長や副総長を務めた人物だった。魔女の歴史研究の第一人者であるヴォルフガング・バーリンガーは、カニシウスを魔女迫害の広範囲化を加速させた重要人物だと見ている[13]。つまり、各地方で応用可能な魔女迫害の「科学的」な理論が、大学で生みだされたのである。

たとえば、ケルン選帝侯エルンスト・フォン・バイエルン（1554-1612）と協働司教のフェルディナント・フォン・バイエルン（1577-1650）は、1607年に魔女裁判手続きの手続きを規定したことで知られている。前者はインゴルシュタットにてイエズス会士の教会で神学を学び、後者は1595年頃にインゴルシュタット大学を修了した人物である。直接的に同規定がケルン司教領の魔女迫害を急進化させたわけではないが、規定によって地方裁判の遂行が容易化したことは見過ごせない[14]。魔女裁判を中央機関の強力な監督下に置くのではなく、大学が設置されているような都市から派遣された「学識法曹」に裁量権が委ねられていた。この「非中央集権化」が魔女裁判増加の要因のひとつだと考えられている[15]。実際に、ケルン選帝侯領では1615年頃から裁判件数が増加し1628年から31年にピークを迎えたとされる。本論にとっては、選帝侯がインゴルシュタットで学んだ人物だった点とともに、「学識法曹」の活躍も指摘しておきたい。

また、帝国自由都市ケルンは多くの修道院や印刷業者を擁する大都市だった。大量の魔女迫害の後に、裁判の賛否に関する出版物が多く世に出された。イエズス会士のフリードリヒ・シュペー（1591-1635）は、魔女裁判に対する批判として『犯罪に対する警告』を1631年に出版している。同書で彼は、裁判が各地域の個人の利害対立をもとになされている点を指摘した。

この魔女裁判を批判する側にもインゴルシュタットが関わっている。裁判の不当性・不合理性を訴えたアダム・タナー（1572-1632）は、インゴルシュタット大学で学んだイエズス会士だった。ただし、タナーは魔女の存在に否を唱えたわけではない。あくまで魔女裁判の不合理そして迫害の犠牲者への哀れみを表明したのである[16]。

このように、「カトリックの砦」としてのインゴルシュタット大学は、大学ゆえに魔女裁判を支える人物を生み出したが、大学ゆえに「合理的な思考法」を身に

つけて魔女裁判の正当性に対する反論を提出する人物も生み出したこととなる。

3.4. 「フランス革命の脅威」とイルミナティの結成、そして大学移転

宗教と科学の中心地であったインゴルシュタット大学は、1800年にバイエルン公国の東部の都市ランツフートに移されることで、いわば廃校となってしまう。同時代のドイツ地域の「脅威」は、今度は西側から到来した。フランス軍のライン渡河の報である。さらに1799年にインゴルシュタットはナポレオンの先遣隊に侵入されている[17]。

フランス軍がライン川に迫った原因は、18世紀後半の世界史上の出来事にその理由を求められよう。それは1789年のフランス革命という市民革命であり、その後に展開されたフランス革命戦争そしてナポレオン戦争である。この市民革命では、合理・知性にもとづいて世界を照らさんとする啓蒙主義の普及が大きな役割を果たしている。

啓蒙主義が行き着いたひとつの到達点は、実はインゴルシュタット大学にあった。まずは、この極点に至る経緯を説明したい。18世紀には啓蒙主義運動の台頭によって学内のイエズス会の影響力は弱まり[18]、1773年のイエズス会禁止令によってその勢力はさらに弱くなっていた。実は、インゴルシュタット大学はイエズス会禁止令前からも啓蒙主義的改革を試みていた[19]。これらの改革が成功しなかったのは、時代の特色である「啓蒙の精神」を圧迫するイエズス会の精神的雰囲気強く残存していたからだといわれる[20]。だが、前述したようにイエズス会の支援するインゴルシュタット大学は「カトリックと科学」を推進する機関だった。ゆえに、「啓蒙の精神」と完全には対立せずに融合した面もあったのである。

この一例を、イエズス会教育を受けて育ったインゴルシュタット大学・教会法教授のアダム・ヴァイスハウプト（1748-1830）に求めることができよう。1776年、彼は啓蒙主義的な秘密結社イルミナティを結成した。この結社は、いわゆるフリーメイソンの一種である。ただし、より一層、啓蒙とモラルのために活動する目的を持ち、フリーメイソンを急進化させた団体だと位置づけられる[21]。「バイエルン啓明結社」とも呼ばれ、知の光によって社会を変革していこうとする者たちの結社だった。最盛期のメンバーは700人を数え、官吏・大学教授・聖職者・貴族に広まっていった[22]。その後、1785年にはドイツ国内の禁止・弾圧によって解散させられるが、1789年のフランス革命前夜の啓蒙運動として、明らかに社会革命的な理想を抱い

4 イエズス会は、カトリック側の宗教改革運動の一つ。フランシスコ・ザビエルもその一員であり、世界中でカトリックの布教活動に従事した。

ており、フランス革命に影響を与えた組織とされた。

イルミナティには、トム・ハンクスが主演した映画『インフェルノ』（ロン・ハワード監督、2016年）などで描かれたような陰謀論がつきまとう。たとえば、フランス革命は啓蒙主義者とイルミナティの陰謀によるものとし、神の秩序に対する反逆として非難されもした[23]。また、イルミナティの目的を「死者とも交流」だと断じる意見もあり[24]。この点は、小説『フランケンシュタイン』の舞台としてインゴルシュタットが選ばれた理由として重要だろう。実際に、作者メアリー・シェリーは、夫である詩人のパーシー・シェリーの影響からイルミナティとフランス革命との関係性に興味を寄せていたことが知られている[25]。

しかし歴史の皮肉というべきか、あるいは必然というべきか、啓蒙主義の理性はフランスにおいて革命をもたらす一要因となり、さらにその市民軍はインゴルシュタットを含むバイエルン地域を脅威にさらした。結果として、大学もまた東側のランツフト市に移転された。その後、1806年にバイエルン王国が設立され、大学組織は王国の首都であるミュンヘンに移設された⁵。これが現在のルートヴィヒ＝マクシミリアン大学、つまりミュンヘン大学である。

大学がランツフトへ移動してしまった1800年以降、インゴルシュタット市は大学都市から軍事都市へと変容することで生き残りをかけた。1861年には人口2万人の約6割は軍人となった[26]。この軍事都市インゴルシュタットはヴァイマル共和国時代に、マリールイーゼ・フライサーの戯曲「インゴルシュタットの煉獄」として舞台上で演じられることとなるが[27]、これは本稿のテーマとは異なるので稿をあらためたい。19世紀に、インゴルシュタットは、大砲製造などの軍需産業を中心に発展する。そして現在は、世界的に知られる自動車メーカーのアウディの本社が置かれ、失業率がドイツでもっとも低い都市として知られている(2018年時点)。

4. 魔術と科学の交差としての『フランケンシュタイン』

4.1. あらすじ

『フランケンシュタイン』は今なお多く読まれ、豊穡な研究成果も出されている小説作品である。まずは物語の概要を記しておこう。

ジュネーブで生まれ育ったヴィクター・フランケンシュタインは、インゴルシュタットで学び、そして生

図2 『フランケンシュタイン』（1831年版）の内表紙

命の秘密を探り当てて人造人間（＝怪物）を生みだす。しかし、フランケンシュタインはその醜さゆえに怪物を見捨て、ジュネーブに戻ってしまう。一方、怪物はインゴルシュタット近郊の森で言葉を覚えて知性と感情を獲得した。しかし、森に住む家族からの拒絶に絶望し、怪物は生みの親であるフランケンシュタインの身の回りの人びとを殺害することで、彼に復讐していく。

以上のあらすじは、映画作品などでも基本的には踏襲されている。しかし現在、一般的には「怪物＝フランケンシュタイン」という誤解が広まっているといえるだろう。原作の「怪物」はインゴルシュタット周辺の森で、文字を覚え、人間存在の愚かさを理解し、それを主人公のヴィクター・フランケンシュタインに突きつけてくる。つまり、「怪物」は図2のように、恐ろしい容姿ではあるものの知性を有する存在として描かれている。

また、原作が複数の語り手によって物語られている点など知られていないことも多いだろう。つまり、北極点を目指す探検家ウォルトンという人物の語りのなかに、フランケンシュタインの語りが入り込み、さらにその中に怪物の語りも入り込んでいるという三重構造になっている。これは極地探検という冒険の危うさと、フランケンシュタインの人造人間創造という科学の危うさを重ね合わせる効果がある。物語では、無理を押して探検家ウォルトンは北極点に向かおうとするが、怪物に追われて疲弊し臨終のときを迎えようとしていたフランケンシュタインは最初、ウォルトンの好奇心に取り憑かれた無謀さを難じる。しかし、最後にフランケンシュタインは探検続行を支持し、彼の、そして科学者の性懲りなさが強調されるのである。

5 1980年に、カトリック大学アイヒシュテット＝インゴルシュタットが設立された。

このような複雑な物語の構造に加えて、メアリー・シェリーは怪物創造の原理をはじめとして各所でぼやかして書いているので、逆に読者の想像力を喚起し様々な研究がなされるようになった。たとえば、ジェンダー的観点、植民地主義と異者への恐怖、サイエンス・フィクション、そしてその後の受容史などである。しかし、本稿の試みのようにインゴルシュタットという怪物創造の場を「想像の場」として捉えたものはない。

原作者のメアリー・シェリーは、1816年6月あたりから『フランケンシュタイン』を執筆しはじめたと考えられる。なぜなら、この小説の着想は1806年のジュネーブの別荘での怪談創作で生まれたからである。この別荘の持主は著名な詩人のバイロン（1788-1824）であり、メアリーの夫で詩人のパーシー・シェリーも怪談創作会に参加していた。他にも医師ジョン・ポリドリ（1795-1821）も参加し、「吸血鬼」の着想を得て後に出版し、これが吸血鬼小説の始原とみなされている[28]。

4.2. 科学と魔術のあいだ

『フランケンシュタイン』は現代SFの祖型とされている。アイザック・アシモフ（1920-1992）は、SFにおける「ロボットが人類を破滅に導く恐怖」を「フランケンシュタイン・コンプレックス」と名づけた[29]。また、彼の作品『われはロボット』に登場する「1. 人間に危害を加えない、2. 命令に服従せねばならない、3. 前二項に反しないかぎり自己を防衛せねばならない」という「ロボット工学の三原則」も、フランケンシュタインの生みだした怪物に起因するとされている[30]。

『フランケンシュタイン』のエピグラフには、ミルトン『失楽園』（1667年）からの文章が引かれている。これは同小説の本質であり、怪物からの問いかけである。科学とフィクション、そして人工知能研究をはじめとして近代以降の科学への警句ともなっている。

創造主よ、土塊（つちくれ）からわたしを人のかたちにつくってくれと頼んだことがあったか？

暗黒からわたしを起こしてくれと、お願いしたことがあったか？

このように『フランケンシュタイン』は、「人」を人間の手で創造することへの意味を深く問うた作品だった。繰り返しになるが、小説『フランケンシュタイン』の怪物は愚鈍ではなく、知性を習得し、創造主であるフランケンシュタインを問い詰める存在である。

さらに「現代のプロメテウス」という副題も、『フランケンシュタイン』の科学とフィクションの関係性を考えるうえできわめて重要だ。ギリシア神話のプロメテウスは、粘土と水から人間を創り出し、ゼウスの稲妻から盗んだ火（これはつまり知とテクノロジー）を人に与えた。ゼウスはプロメテウスの行為に激怒し、彼をコーカサスの山中の岩場に縛りつけ、鷲に肝臓を啄ませたのである[31]。プロメテウスには二つの象徴性がある。一方では人類の救い手として、他方で神への裏切り者としての側面であり、これらは「科学者」を表現しているといえるだろう。

また、主人公フランケンシュタインは、啓蒙主義の影響を色濃く受けている点にも注目したい。

父が細心の注意を払って教育したため、わたしの頭は超自然の恐怖に取り憑かれなくなっていました。ですから、迷信に震えたり、亡霊を怖れた記憶はまったくありません。闇が想像力に影響を与えたこともないし、墓場も、わたしにとっては、生命を失った肉体を迎える場所でもありません[32]。

このように、超自然的な力を知によって克服しているさまが描かれている。さらに本作の着想にも、19世紀初頭の科学発展が関わっている。

この物語のもととなったアイデアは、ダーウィン博士及びドイツの一部の生理学者のあいだで、不可能ではないとされているものである[33]。

これは、『フランケンシュタイン』の初版（1818年）の序文の出だしだ。この「ダーウィン」は、進化論のチャールズ・ダーウィンの祖父エラズマス・ダーウィン（1731-1802）である。そしてこの一文を書いたのは、夫のパーシー・シェリーだ。彼は、この後に「この話（『フランケンシュタイン』）に書かれている興味深い出来事は、幽霊や魔法を報告しただけの話にあるような欠点を免れているのである」と続ける[34]。

この物語の書かれた19世紀の前半、イギリスは産業革命によって急激に社会が変化していた時代だった。オカルト的なものが科学の力によって排除されたが、他方で啓蒙のプロジェクトとしての近代科学はまた、「オカルト的な知」を強化する場合もあったのである。

これは100年後の20世紀前半にいたって、かのコナン・ドイル（1859-1930）が神秘主義的な心靈主義者だったことと軌を一にしている。つまり、科学の力は、「魔法」を受けると考えられていたのである。

他の例を挙げれば、ドイツでヴィルヘルム・レントゲン (1845-1923) が X 線を発見しドイツ中で講演会を行った後に、X 線によって人の心も透けて見えるという未来観に人びとが取り憑かれたように、である [35]。このように、科学主義とオカルティズムは、あるときは対立し、あるときは歩みをとみにしてきた。

ヴィクター・フランケンシュタインも「科学の進歩」だけにとらわれた人物としては描かれていない。彼をして人造人間を創らしめた研究動機とは何だったのだろうか。これに関しても多くの文学研究者が指摘するように、インゴルシュタット大学入学決定の後にフランケンシュタインの母親の死が描かれ、それによって一時中断となっていた大学入学へと話は進んでいく。彼は、「母の死」を契機として、生と死、そして生命創造への欲望を抱いたのである。

そして学術的には、「想像」を大きな原動力とする錬金術への傾倒から、それを動機の重要なエナジーとして「近代的な科学」を用いる点にフランケンシュタインの研究の結実がみられるのである。

科学史研究者のクロスビー・スミスは、以下のよう

「熱に浮かされた狂気にとりつかれ、わたしは理性を備えた生き物を造り上げました」。瀕死のヴィクター・フランケンシュタインはウォルトンにそう告白する。メアリー・シェリーのこの傑作を形作っているのは、主に、二つの力の間の激しい拮抗である。すなわち、この小説は、表面的には啓蒙時代のイデオロギーに基づく「理性」を描いているが、その「理性」は、自然や人間存在の内にある、より深く、より暗い力によってつねにおびやかされているのである。ロマン派の詩人たちは、この深く暗い力に引きつけられていたのであり、うら若いメアリーもその文化を共有していた [36]。

つまり、主人公のフランケンシュタイン自身も前近代的な錬金術と近代的な科学との間の存在である。彼は、インゴルシュタット大学で学び、古き錬金術などの学問について破棄するように、化学者のクレンペ教授に諭される。しかし、フランケンシュタインにはどこか納得できない気持ちがあった。小説内から以下の部分を引用しておく。

近代自然科学の果たす役割に、軽蔑の念さえ持っていたのです。科学の大家たちが不滅の力を追い求めている時代は、その目論見が無駄に終わっ

たとはいえ、やはり壮大なスケールがありました。今では状況が変わってしまい、研究者のめざすものが限定され、科学への興味を育んでくれたはずの夢を、毛嫌いするようになっていきます。限りのないスケールを持つ幻想を捨てて、ほとんど価値のない現実を受け入れよと迫っているのです [37]。

青年フランケンシュタインに多大な影響を与えた人物として登場する、インゴルシュタット大学のヴァルトマン教授は、彼にこのように語っている。

こうした人たち（パラケルススなどの錬金術研究者）の尽きることのない情熱があったればこそ、現代の科学者の知識が築かれたのですから、その意味では感謝すべきなのです。新しい名前をつけたり、一貫した分類をおこなうといった楽な仕事は、わたしたちに残されたのですが、事実を明るみに出す上で彼らが果たした役割には大きなものがありました。天才たちの努力がたとえ間違った方向に向かっていたとしても、究極的に人類の確固たる利益となることは間違いないのです [38]。

これがフランケンシュタインを捉えた「想像」であり、ファウスト的な狂気、つまり知識への情熱と傲慢であった [39]。もちろん、彼自身もヴァルトマン教授の言葉は、「(自らを) 破滅させる運命の言葉」だと予期している [40]。

4.3. インゴルシュタットとの交差

ここで明らかになったことは、主人公の科学者フランケンシュタインの知の態度とインゴルシュタットの知の環境が重なり合っているという点である。では、なぜメアリー・シェリーはインゴルシュタットとその大学を作品の舞台としたのだろうか。この問いには歴史学や人文科学研究では、完全に答えることはできない。そこで、「はじめに」で記したように、本稿では「想像の場」としてのインゴルシュタットと小説『フランケンシュタイン』との関連性を通して考えていこう。

まず、作者のシェリーがインゴルシュタットを訪れたという記録はなく、想像だけで小説を著した可能性が高い。大学設立以降のインゴルシュタットでは、先述のようにキリスト教と学問知の拮抗が見られた。そしてファウストだけではなく、パラケルススが奇蹟を起こした都市だとされている点も重要だろう [41, 42]。謎の多い人物だが、パラケルスス（後の別称でホーエ

ンハイム）こそは、錬金術によって人造人間「ホムンクルス」の「製造」を唱えた人物であった。『フランケンシュタイン』にも、バラケルススは作品全体で4回の言及がある。そして、インゴルシュタット大学に18世紀前半に設置されていた解剖学研究所は、物語の核と密接に結びついている。

次に、同作では「17・年」としか表記されていないが、1792年から1799年にかけての物語だと考えられている[43]。これは、怪物がヴォルネーの『諸帝国の滅亡』（1791年）を読む描写があることなどから分かる。また、1790年代後半には、ドイツ語圏（神聖ローマ帝国の領域内）におよそ40以上の大学が存在していた。その中から、著者は「消えてしまった」（物語の時間では「消えつつある」）大学であったインゴルシュタット大学を舞台としたのである⁶。

18世紀後半を生きたメアリー・シェリーが、どの程度まで時代の影響を受けているかについても多数の研究が存在する。彼女は、急進的な社会思想家で小説家の父ウィリアム・ゴドウィンと女権拡張論者で小説家の母メアリー・ウルストンクラフトとのあいだに生まれ、開明的な考えをもっていた。そして、18世紀後半のヨーロッパの重大事件であるフランス革命を期待と不安をもって捉えた同時代の知識人のひとりだった。フランス革命やそれにいたる啓蒙思想が、この小説に多大な影響をおよぼしていることはすでに指摘したとおりである。

また、インゴルシュタット市には「イスラームの脅威」の影響を受けながら科学の最先端組織である大学が建てられたことも指摘した。次に、市民革命という啓蒙のプロジェクト、つまり「フランス革命の脅威」によって、結果的に都市から大学は姿を消すことになる。

インゴルシュタット大学の「先端性」と「危機」が小説『フランケンシュタイン』と重なり合っている。主人公が学んだのはインゴルシュタット大学であり、怪物が生まれたのもまた同市だった。繰り返すが、作者が同市を怪物創造の場として選んだ理由は詳らかではない。しかし、当時すでにドイツ語圏（神聖ローマ帝国領域内）でおよそ40以上の大学が存在していたなかで、同大学を選んだのはイエズス会的な「カトリック的な科学」と解剖学研究所をはじめとする「合理主義的科学」との拮抗、そして同時代的に発生していた

啓蒙主義の発展（イルミナティ）をみた都市だった点は看過できないだろう。インゴルシュタットは、19世紀初頭において、『フランケンシュタイン』の舞台として最適な想像性を放っていた都市だったのである。

4.4. インゴルシュタットの「消失」

『フランケンシュタイン』は1818年の公刊以来、イギリスを中心に多くの人びとに読まれたが、最初にこの人気・認知度を押し上げたのは演劇であった。とくに後の映像作品でも多用される「怪物創造」の瞬間にフランケンシュタイン青年が放つ台詞「生きている！」は、1823年の演劇『フランケンシュタイン』における台詞だった[44]。劇では、装置としての「舞台」が重要視されるので都市「インゴルシュタット」の特性よりも、フランケンシュタイン博士の研究室（実験室）などの装置が強調された。

21世紀を生きる私たちの「フランケンシュタイン」イメージは、1931年のアメリカ映画『フランケンシュタイン』に多大な影響を受けている。つまり、「怪物＝フランケンシュタイン」という誤解は、この映画によって一気に広まったのである。それはたとえば、藤子不二雄の漫画『怪物くん』に出てくる「フランケン」のようなイメージである。この「怪物＝フランケンシュタイン」イメージが扱われた作品では、インゴルシュタットという都市は姿を消している。

この科学者「ヴィクター・フランケンシュタイン」消失の理由を、ヴィクトリア朝文学を研究するルイス・ジェームズは、以下のように述べている。

1930年代までには、科学者についての一般的なイメージは、メアリー・シェリーの時代とは完全に変わっていた。科学技術が目覚ましい進歩を遂げている時代に、科学者がなにか間違いを犯すなどという設定にするわけにはいかなかった[45]。

このような設定変更において、都市インゴルシュタットという魔術・科学の先進都市を登場させる必要性は希薄になった。怪しげ、かつ半魔術的な実験室での怪物の「創造」は、21世紀を生きる我々に染みついたフランケンシュタイン・イメージである。しかし、18世紀末を舞台にし、19世紀初頭に書かれた原作の『フランケンシュタイン』は、「最新」の科学的知見によって、怪物を創造した「現代のプロメテウス」としてのヴィクター・フランケンシュタインを登場させていた。

1931年の映画『フランケンシュタイン』は、インゴルシュタットを消し去り、科学の過誤を消し去るため

6 先述したように、インゴルシュタット大学の移動はフランス革命軍の脅威であり、1790年代にはまだ趨勢は決まっていなかった。しかし、1800年の大学移設を知る作者シェリーからは「消えゆく」と見えていても不思議ではないだろう。

に、フランケンシュタイン博士の助手を描いている。この「愚かな」助手が、誤って「犯罪者の脳」を博士に渡してしまうことで、怪物は悪の存在になる。繰り返すが、メアリー・シェリーの書いた「怪物」は知性的であり、欲望に取り憑かれたフランケンシュタイン博士を諭すような警句を放つ存在なのである。

1994年に制作され、日本では翌年に公開されたケネス・ブラナー監督『フランケンシュタイン』は「原作に忠実に」をモットーにして作られたので、インゴルシュタットが舞台として登場する。しかし、城壁都市でペストが大流行する、混沌とした怪しげな「中世都市」のような描写だ。インゴルシュタットの先端性が強調されることはない。

5. おわりに

歴史学研究の王道は、史料分析によって歴史的な位相を探るやり方である。本稿は、そこから逸脱しながらも記憶の場研究に刺激を受け、歴史研究の立場からフィクションを支える「想像の場」を探ってみた。とくに、インゴルシュタットというドイツの一都市の歴史を中心に「想像」と「科学」について考察することで、フィクションの想像力の源泉となった「想像の場」として同市を捉えてみた。

「想像の場」としてのインゴルシュタットは、大学創設の15世紀以来、「イスラーム」への恐怖、カトリック・プロテスタントの対立、そして「魔女」への恐怖を大学という知の機関において「科学的」に解決しようとする場だった。

科学と想像との融合と拮抗の場、そして進歩と破局の不可分性を、インゴルシュタット史は象徴している。これが、小説『フランケンシュタイン』のフィクションの想像を支えるものだったのである。

企画の趣旨に合わせ、これらの想像にとって最も重要な引用で締めくくりたい。本稿ですでに言及した『フランケンシュタイン』のエピグラフの引用である。

創造主よ、土塊（つちくれ）からわたしを人のかたちにつくってくれと頼んだことがあったか？

暗黒からわたしを起こしてくれと、お願いしたことがあったか？

人工知能が「創造主」にこのように語りかけてくる未来は、すでに『フランケンシュタイン』によって預言されていた。人類は自ら創り出した知から発せられる、この問いに向き合う日は近いだろう。そして、向き合うための想像力にとって、本稿で扱った「想像の

歴史」がその助力となるかもしれない。

謝辞

「インゴルシュタットの不思議」に出会わせてくれた学生、そして日々の知的刺激を与えてくれる歴史学に感謝を述べたい。

参考文献

- [1] 安川晴基: “『記憶』と『歴史』 集合的記憶論における一つのトポス,” 藝文研究, Vol.94, pp. 282-299, 2008.
- [2] C. Siebeck: “Erinnerungsorte, Lieux de Mémoire,” Docupedia-Zeitgeschichte, Version: 1.0, 2.3.2017: http://docupedia.de/zg/Siebeck_erinnerungsorte_v1_de_2017?oldid=126408 [accessed July 30, 2018]
- [3] 別府昭郎: “近代大学の揺籃 一八世紀ドイツ大学史研究,” 知泉書館, p. 101, 2014.
- [4] G. Treffer: *Ingolstadt. Kleine Stadtgeschichte*, Regensburg (Kindle Edition), No.93, p. 2221, 2018.
- [5] K. G. アッポルド, 徳善義和訳: “宗教改革小史,” 教文館, pp. 281-296, 2012.
- [6] Treffer: *a.a.O.* No.1290.
- [7] 溝井裕一: “ファウスト伝説 — 悪魔と魔法の西洋文化史,” 文理閣, p. 29, 2009.
- [8] P. M. Palmer and R. P. More: *Sources of the Faust Tradition*, Oxford University Press, p.89, 1936.
- [9] *Ibid.*, p. 29-30.
- [10] *Ibid.*, p. 89.
- [11] 溝井: 前掲書, p. 30.
- [12] 小林繁子: “近世ドイツの魔女裁判 民衆世界と支配権力,” ミネルヴァ書房, 2015.
- [13] W. Behringer: “Meinungsbildende Befürworter und Gegner der Hexenverfolgung (15. bis 18. Jahrhundert),” Helfried Valentinitich (Hrsg.): *Hexen und Zauberer. Die grosse Verfolgung – ein europäisches Phänomen in der Steiermark*, S.228, 1987.
- [14] 小林: 前掲書.
- [15] 同上, p. 79.
- [16] ウォルフガング・ベーリンガー, 長谷川直子訳: “魔女と魔女狩り,” 刀水書房, pp. 251-261, 2014.
- [17] Treffer: *a.a.O.* No.1272.
- [18] 木村晶子: “『フランケンシュタイン』における空間,” メアリー・シェリー研究 — 『フランケンシュタイン』作家の全体像, 鳳書房, p. 56, 2010.
- [19] Treffer: *a.a.O.* No.1282.
- [20] 別府: 前掲書, p. 109.
- [21] ウルリヒ・イム・ホーフ, 成瀬治訳: “啓蒙のヨーロッパ,” 平凡社, p. 298, 1998.
- [22] 同上, p. 299.
- [23] 木村: 前掲書, pp. 56-57.
- [24] 同上, p. 56.
- [25] G. McNiece: *Shelley and the Revolutionary Idea*, Harvard University Press, pp. 96-99, 1969
- [26] Treffer: *a.a.O.* No.1463.
- [27] 田丸理砂: “「女の子」という運動 ワイマール共和国末期のモダンガール,” 春風社, 2015.
- [28] 武田悠一: フランケンシュタインとは何か 怪物の倫理学, 彩流社, p. 17, 2014.

- [29] 武田悠一: “序章 フランケンシュタインの子供たち,” 増殖するフランケンシュタイン 批評とアダプテーション,” 彩流社, p. 8, 2017.
- [30] 山田夏樹: ロボットとジェンダー『フランケンシュタイン』, 『鉄腕アトム』における『不完全』な身体イメージ, 昭和文学研究, Vol.53, pp. 25-37, 2006.
- [31] 武田: フランケンシュタインとは何か, p. 8.
- [32] メアリー・シェリー, 小林章夫訳: “フランケンシュタイン,” 光文社, p. 95, 2010.
- [33] 同上, p. 19.
- [34] 同上, p. 19.
- [35] 伸井太一編: “第二帝国（下）,” バブリブ, pp. 4-5, 2017.
- [36] ロスピー・スミス: フランケンシュタインと自然の魔力 スティーブン・バン編, 遠藤徹訳: “怪物の黙示録『フランケンシュタイン』を読む,” 青弓社, p. 53 1997.
- [37] シェリー: 前掲書, pp. 86-87.
- [38] 同上, p. 90.
- [39] J. J. ルセルクル, 今村仁司ほか訳: “現代思想で読むフランケンシュタイン,” 講談社, p. 31, 1997.
- [40] 同上, pp. 88-89.
- [41] 大橋博司: パラケルススの生涯と思想, 思索社, p. 37, 1988.
- [42] 木村: 前掲書, pp. 58-59.
- [43] ルセルクル: 前掲書, p. 31.
- [44] 武田: フランケンシュタインとは何か, pp. 175-177.
- [45] ルイス・ジェームズ: 怪物の系譜 純文学と大衆芸術に生き続けるフランケンシュタインの怪物, p.120.

(2018年8月9日 受付)

[問い合わせ先]

〒167-8585 東京都杉並区善福寺2-6-1

東京女子大学

柳原 伸洋

E-mail: yanagihara0701@gmail.com

著者紹介

やなぎはらのぶひろ
柳原 伸洋 [非会員]

2011年東京大学大学院総合文化研究科単位取得退学。在ドイツ日本大使館専門調査員、東海大学文学部講師を経て、現在、東京女子大学現代教養学部歴史文化専攻教員。専攻はドイツ現代史（空襲研究）。